

# ファルセットに恋をして 堤 洋子

トコトコトコトツ、ステージに現れた歌手は、「クリスマスですから」と言いおいて、シューベルトの『アヴェ・マリア』を会場の観客と私たち視聴者に届けた。それは衝撃的なクリスマスプレゼントだった。

天上から降り立ったような高く澄んだ声。まるで神様からの贈り物だ。今までに聴いたことのない声の種類だった。

二〇二二年のクリスマススイブにテレビ朝日「題名のない音楽会」で藤木大地のファルセットを初めて聴いた。

一九八〇年生まれ藤木は元テノール歌手だったが、三十一歳でカウンターテナーに転向した。カウンターテナーというのは裏声で歌う男性歌手のことだ。

ある日、風邪をひいてしまい歌声が出せなかった。覚えなれない曲が多くあったので仕方なく裏声で歌っていたら、リラククスして自由に歌えた。そこで自分という楽器はカウンターテナーだと気づいたそう。彼が風邪をひいてくれなかったら、テノールで歌い続けていたら、私たちは永久にその裏声（ファルセット）に触れることはできなかった。

藤木大地を知ってからは、メディアを通して彼の歌唱を聴き、リサイタルやコンサートにも出かけ、エールを送り続けている。

もし人間（ひと）以外で「恋」という感情があれば、いま私は藤木のファルセットにときめいて恋をしている。

藤木の『アヴェ・マリア』が心を揺さぶった一年は不幸な内に暮れようとしていた。

この年大切な人たちを三人も失ってしまった。すべて私と同年の七十歳代だ。

一人は幼友達で亡夫と諍いをするたびに私の悩みに寄り添ってくれた。亡夫と添い遂げられたのは彼女の適切なアドバイスのおかげだ。

もう一人は職場の友人だった。あんないい人がなぜ七十歳少して逝ってしまったのか。彼女の病気が腹立たしかった。この状態を、「スピリチュアルペイン」と呼ぶことを知った。

残る一人は高校時代の友人で私の短歌の先生だった。文芸部で知りあい共に創作に励んでいた。文才があり顧問の教諭も一目置いていた。彼女は小説ではなく短歌の道に進んだ。所属する結社の歌誌にも必ず掲載され好評を博していた。折にふれて湧いてきた短歌は友人に意見を乞うほどだった。その夫が編んだ歌集を読むと、鏤められた歌の数々からも友

人の才能が忍ばれる。

その年、心密かに気になっていたひとが、姿を消してしまったのだ。思い悩んでいたときに一通のeメールが送信された。全文を読むより先に心当たりがないため削除した。後から考えると短い前文に覚えがあった。そのひとにはメールアドレスを知らせたものの相手のアドレスを知らなかった。後悔と悲嘆に覆われた月日は師走になっても消えない。

はびこっていた負のエネルギーが藤木の声を通して感動というエネルギーに変換されていく。旅立った友人たちへの喪失感はその解決を待つことにする。気になっていたひととは縁がなかったのだろう。不運なできごととは諦めという形でクリヤーすることができた。

藤木は三枚のアルバムをリリースしている。

陰りのない声の虜になり魔法にかけられたようにCDに手を出してしまう。ディスクの中に引きずりこまれて日々その歌声を聴く。魔力がひそんでいるのかもしれない。私はその声と同声どうせいしている。今までの音楽人生は（シヨパンを除けば）藤木の声と出会うためにあつたと断言できる。

『死んだ男の残したものは』藤木のファーストアルバムだ。

私はここにレコーディングされているいくつかの歌詞が気に入っている。

『お菓子と娘』は、西条八十のパリ生活での新鮮な感動が歌詞から伝わってくる。

『こもりうた』では「さあ おしゃべりはやめて ほら 頬におやすみのキス」というフレーズが可愛い。幼い子に歌ってあげたいような曲だ。

『てがみ』では「さやえんどうの出荷です」などというユーモラスな詩句が見受けられる。『死んだ男の残したものは』の静かな迫力には圧倒された。作詞・作曲・歌唱が三位一体となって耳を射ってくるからだ。

日本音楽コンクールで優勝したときの課題曲、『小さな空』も加わる。

このCDを手にしたとき、私は具合が悪くて伏せていた。音楽を聴く状態ではなかったものの、流してみても、煩わしいようなら止めようと電源を入れた。アルバムから聞えてきたのは限りなく優しい声だった。私はその声に癒やされ慰められ守られながら、夢の世界に誘われていった。気が付くとCDプレーヤーのライトが陽の落ちた室内の一隅を青白く照らしていた。

リリースされた三枚目は『いのちのうた』と題されるアルバムだ。ここには『40歳のカストラート』というオペラから抜粋した曲が並んでいる。藤木が東京文化会館から依頼されて企画原案・選曲を担当した作品だ。

カストラートというのは、ライナーノーツによると、少年期の高い声を保つために去勢した男性歌手のことだが、その後カストラートが禁止され、ロマン派時代には高音域の男

声の役を使うオペラが無くなった。二〇世紀に入ると、作曲家は再び高音域の男声としてのカウンターテナーが登場するオペラを書き始めた、とあった。

『お客を招くのが趣味でね』は、コミカルな情景が浮かんでくる。ヒックヒックと聞えるほろ酔い加減の演出や前奏のピチカート音が、曲想を効果的に語っている。

尋常ではない激しさを伴った『抗いようのない悲しみが』を、藤木は力強く高らかに歌っていた。

これらの歌声に耳を傾けると、彼はオペラ歌手だったんだ、と納得させられる。

藤木は日本人初のカウンターテナーとしてウィーン国立歌劇場にデビューした。アリベルト・ライマン作曲のオペラ『メデア』で、神の使者ヘロルド役だった。輝くばかりの白いギリシャ風の衣装を纏った藤木も劣らず輝いている。

作家の島田雅彦が台本を手がけたオペラ『スーパーエンジェル』にも出演しているが、島田を「その声に触れると、奇蹟を信じたくなるし、もっと自由になれる気がしてくる」と言わせている。

カウンターテナーの役柄は、天使・ボーイ・神の使者・精霊が多い。その声には性別や人間を越えた存在を感じている。

二枚目の『愛のよろこびは』藤木のメジャー・デビュー・アルバムで、タイトルは村上春樹原作の映画『ハナレイ・ベイ』の主題歌だ。

聞き覚えがあるこの曲は高校時代に習った。卒業してからも時に応じてそのメロディを口ずさんでいた。

私は職場のコーラス部員だったせいか、広報部に配属されると職務の一環としてアナウンス的業務を担当していた。部内の希望では、顔はどうでもいいから声の良いのを頼むということだった。そこに目を付けられたそうだ。後日、先輩がこっそり明かしてくれた。

喜ぶべきか悲しむべきか複雑な心境だ。当時の声も年を重ねた今では影を潜めてしまった。

藤木はローマ国際宗教音楽コンクールでのファイナリストでもあり、ハンスガボア・ベルヴェデーレ声楽コンクール世界大会では、ハンスガボア賞を受賞した。

アルバムに収められた曲目はバロックからコンテンポラリーまで幅広く、これらの経歴を物語っている。

最初に購入したこのディスクには、初恋の曲『アヴェ・マリア』やリサイタルのアンコールで歌った『リュートを弾くオルフェウス』『天使のパン』が録音されている。

『天使のパン』はボーイソプラノと相まっつての響きに溜息さえでしてしまう。清らかな音の響きは葉末に置く朝の白露を思い起こさせる。

ドイツ歌曲での、こぢんまりした巻き舌が耳に入ると、微笑ましくなってしまう。

高らかに歌い上げる透明感あふれる声は、月の光りや宝石に射す光りや雪山に照る光りや貴婦人の涙だ。深い透明度を誇る湖もその声には叶わないだろう。真っ直ぐに伸びる低めのメゾソプラノは空に広がる霞にも似ている。怖いもの知らずに突き進む潔さは胸がすく。長調から短調、短調から長調への移調、高音から低音、低音から高音へ移る音域では軽やかにスピニングしている。

藤木のファルセットには靈性が宿っている。一面で、珠玉の歌声は官能を呼び覚ますような怪しげな気配さえ湛えている。魅せられたと同時に魔せられたとも言えよう。

このブックレットに写る藤木は美男すぎて近寄りがたい。『いのちのうた』シリーズのリハーサル風景にみる藤木のほうが、自然体で親しみが湧く。

藤木はコンサートの最後には必ず共演者を先に紹介する。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」とあるように、その謙虚な姿勢を貫いてほしいと願う。藤木は伴奏者を共演者と呼んでいる。二人または複数で音楽を作り上げていくからだ。

欧州の歌劇場への出演にも再度チャレンジしてもらえたらと、わがままな要望をも発信している。

カウンターテナーの歌手寿命は短いと言われるが、米良美一めらよしかずや彌勅忠史は五十歳を過ぎても活躍している。藤木にも体調管理や声調管理を怠らずにしてもらい、できるだけ長くファルセットを響き渡らせてほしい。

いつかこの星を離れる時、藤木の歌声に見守られながら別れを告げたい。

#### 参考音源

- CD 『死んだ男の残したものは』レーベル ワーナーミュージック・ジャパン
- CD 『いのちのうた』レーベル ワーナーミュージック・ジャパン
- CD 『愛のよろこびは』レーベル キング インターナショナル